

令和4年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

				本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
学習	教育研究	公開研究会		研究メインテーマ 「社会の変化に対応できる生徒の育成」 ～SDGsを核としたカリキュラムマネジメントの実現～に向けたプレ公開を実施する。 ・研究部にも大学の先生方を積極的に招聘し、来年度の本公開に向けた準備を行う。 ・5月、7月、11月、2月の4回、授業研究会やプレ公開授業を行う。	・月1回以上の全体研究会を実施し、研究部がポイントを定め、教職員全体で研究を進める。 ・カリキュラムマネジメントを推進し、各教科等の学習とSTEP（SDGsを取り上げた探究学習）の学習において資質・能力の向上を目指した授業研究を進める。 ・コロナ禍の状況に対応し、多くの方に参加していただきやすい公開の方法の工夫を考える。	【成果】 ・7月にプレ公開研究会Ⅰ，11月にプレ公開研究会Ⅱを開催できた。その中で本次研究の概要を発表し教科研究授業を行い、大学の先生方等から指導・助言をいただいた。全体会においても、本次研究について他校教員や本校OBからご意見をいただくことができた。 【課題】 ・授業参観者数は昨年度と比較して増加したが、全体会への参加は多いとはいえない状況がある。積極的な情報発信，広報活動を今後も行っていく。 ・カリキュラム・マネジメントを推進し，各教科間や各教科等と総合的な学習の時間での探求学習（STEP）との往還を深めていく。	・研究に対し精力的に取組が行われており、進め方が明瞭で、次年度へ向けて計画的に進められていることは評価できる。 ・附属の強みである大学や附属OBとの連携を通し、より良い授業となるよう努めていただきたい。 ・次年度に向けて、多くの方が参加できるよう日程や公開方法も含め検討が必要。また、各教科等と総合的な学習の時間でのSTEPとの往還を深める上で、メインテーマに迫るべく生徒への意識付けを大切にし、その結果として、生徒の学力の向上や教員の指導力向上にどのように繋がったかを示してほしい。	・積極的な情報発信，広報活動を行ううえで，開催通知を早期から複数回行うことが必要と考える。また学校ホームページの活用や，他校の研究会への積極的な参加および、他校参加時での情報発信も行っていく。 ・全体研究会や教科部会において，各教科と総合的な学習の時間での探求学習（STEP）との関連性について継続して議論していく。
		日々の研究		・生徒に育成したい資質・能力について，「まなびスケール」を活用し，教員間で共通理解を図りながら研究を深めていく。 ・大学の先生方に各教科等の授業についての指導助言を仰ぎ，授業力の向上を図る。 ・先行研究の調査研究を行う。	・週1回程度、各教科で教科部会を定期的に行い，資質・能力の向上をどのように進めるか研究を進める。 ・学部と附属学校教員による連携授業や，大学生の授業アシスタントを活かして授業改善を行う。 ・文部科学省，三重県教育委員会等の開催する研修会や他附属の公開研究会に積極的に参加する。	【成果】 ・昨年度から継続して各教科等とSTEPで共通した内容の「まなびスケール」を活用することで，資質・能力の汎用性を確かめることができた。 ・「まなびスケール」の信頼性・妥当性を確かなものとするために2点の改訂を行った。 ①具体的な場面を追記し，学習者にとってより自己評価しやすいようにした。 ②学習者自身（生徒会役員）の意見を取り入れることで，実態に即したものとした。 ・各教科とSTEPとの関連性を明らかにするために，ESDカレンダーを作成した。 ・STEP中間発表会（5月）および最終発表会STEP（10月）を開催し，探求学習について計画したことを発表（公開）する機会を設けることができた。 【課題】 ・子どもに育成したい資質・能力の伸長が，学習者に対する質問紙調査でしか測ることができていない。 ・各教科等とSTEPとの関連性において，それぞれの教科で捉え方にばらつきが生じている。そのため，より深い議論をしていく必要がある。 ・子どもたちの中には，STEPの取組において調べ学習で終始したり，意欲的に取り組めなかったりするものがある。教員がファシリテーターとして効果的に機能していくための研鑽が必要である。	・「まなびのスケール」の改善に向けて、生徒の声を取り入れたことは評価したい。 ・文化祭に於いて最終発表会を参観する機会を得、生徒の発表力に感心させられた。また、発表により生徒相互の学び合いもあり、学習の深まりや意欲に繋がると感じた。 ・生徒アンケートの「授業は工夫されていてわかりやすい」の項目について、3年生の否定的数値が昨年度より若干ではあるが増加しているのが気になる。 ・教科によるバラツキや生徒個々の理解度、意欲の差を小さくするよう取り組んでいただきたい。 ・教員側の視点で成果と課題が明らかにされているが、生徒が具体的にどのような力をつけたかを明らかにしてほしい。	・「まなびスケール」および「ESDカレンダー」を有効活用することで，単なる合科ではなく教科等横断的なカリキュラムを進めることが可能であると考える。生徒にとっても教員にとっても，これら2つが身近なものとして活用できるよう，その内容を常にブラッシュアップしなければならない。学習者である生徒の声を取り入れながら，常により良いものを目指す姿勢を大切にしたい。 ・教員のファシリテーションスキル向上のため，全体研究会でのワークショップや研修会を実施する。 ・STEPにおいて，それぞれの研究グループの活動を調べ学習から脱却させる手段の1つとして積極的に外部団体と連携する必要がある。年間の活動予定を早々に示し，生徒も教員も計画的に活動を進めることができるようにする。

令和4年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

		本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
指導	少人数指導	・1・3年生英語科、1年生数学科及び全学年技術科で少人数指導（TT）を実施する。 ・少人数指導の効果について検証し、指導方法の工夫改善を図る。	・TTの強みを活かし、生徒一人ひとりの理解状況の把握に努め、きめ細かな指導を行う。 ・2人でできる工夫を日々出し合い、指導方法を柔軟に工夫していく。	<英語科>【成果】 ・生徒は、ペアやグループ学習の中で互いに質問がしやすく、一人ずつの発表の機会が多くあるため、英語を積極的に使う姿が見られた。 ・生徒個々の理解度やつまずきを把握して的確な指導を行うことができた。 ・1人1台タブレット端末の整備により、以前よりも生徒一人ひとりのコミュニケーションの場面が増えた。 【課題】 ・生徒個々の理解やつまずきの分析から、さらに伸ばすにはどうすればよいかを考察する必要がある。 ・生徒どうしの交流を観察しながら、理解できない生徒への手立てを工夫する必要がある。 <数学科>【成果】 ・2人の指導者のかけあいを見て、生徒が疑問を持ったり、自分で考えたり、仲間と話し合うなど主体的な姿が多く見られるようになり授業が活性化した。また、このスタイルで授業を行うことで教員のスキルアップにもつながることができている。 【課題】 ・生徒一人ひとりの理解の状況やつまずきの実態を的確に把握し、個に応じたきめ細やかな関わりや助言をより一層充実させていく。	・少人数指導が定着し効果が認められるならば、他校に先駆けて他教科での導入も検討していただきたい。 ・少人数指導で生徒の変化を通して教員が効果を実感できているようであるが、生徒や保護者はどのように受け止めているかアンケートを含めた結果を示してほしい。 ・英語は、少人数グループでの指導が効果的に思う。数学は、グループ別にひとつの問題を解いていく形式を通して、他の人の考え方が理解できるので効果的ではないか。 ・少人数指導を通して、内容の密度が増すことによる生徒個々の理解度の確認や個別のケアをしていただきたい。 ・どの場面でも指導する側の体制が充分にとれるかが問題になると思う。	<英語科> ・一斉授業の中でも、少人数グループ（班）で活動をする場面を有効的にいれながら、生徒が共に学び合う場面を増やしたい。 ・T1の指示の中で、T2が活動に出遅れている生徒への支援やスローラーナーへの支援をきめ細やかに行っていきたい。また授業内でICTを使う場面も増えたので、T1T2で協力をし、活動の時間を有効に時間を使っていきたい。 <数学科> ・より一層の指導の個別化と学習の個性化を進めていく必要があるが、少人数教育だからといって、孤立した学びをめざすべきではない。 ・協働的な学びを進めていく中で「個別最適な学び」の充実をさらに図っていく。 ・子ども自身が、自立的に学んでいく力を付けていけるよう工夫改善する。 ・T1とT2の連絡を密にし、評価等が一貫性を持つようにする。
	学習環境の整備	・タブレット端末（iPad）を効果的に活用し、授業における深い学びや、学びの個別最適化を推進する。 ・ICT機器の更なる充実を図り、授業の質の向上をめざすとともに、各教科で必要な備品もできる限り整備できるように予算を有効に活用する。	・Google for Educationやロイノートの活用などについて交流し、より効果的な機器の活用を進める。 ・デジタル・シティズンシップ教育を浸透させ、デジタル社会のよき参画者を育成する。 ・デジタル教科書の活用について研修を進める。 ・ICT機器やメンテナンス等について予算化を図る。	【成果】 ・シンプルにタブレット端末を使用する場面が（生徒、教員ともに）増えた。 ・提示や提出などをデジタルで行う場面が増えた。 ・生徒が自発的にしたいことをできる限り受け入れて可能にした。 （例）クイズの開発、ホームページの開設など 【課題】 ・GIGAの真骨頂でもある「共有」「共同編集」がまだまだ弱い。 ・タブレット端末の使用に対する制限を教員側が意識してしまっている。 ・情報モラルとデジタル・シティズンシップの勘違いがまだある。 ・タブレット端末が破損した場合などの対応をより早くする必要がある。 （学校ではどうにもできない部分があるかもしれないが）	・授業参観を通してタブレット端末の活用が進んでいることを実感できた。今後、深い学びや学びの個別最適化の実現に向けて、更に研究を進めていただきたい。 ・タブレット端末の使用に対する制限について、教員サイドで解決できる内容があれば、早急に取り組んでほしい。 ・デジタル社会の現代において、紙媒体主体は益々、特異な存在になって行く事が予想されるため、これからも積極的にICTを活用した授業をお願いしたい。その上で機器の故障等に備え、メンテナンスや予備の配置等、授業に支障がないよう大学への要望が必要と思われる。	・タブレット端末の使用について、教員が知らない・分からないという理由で、何でもかんでも禁止するのをやめる。 ・生徒に不自由と自由の関係を考えさせることを通してデジタル・シティズンシップ教育を推進する。 ・職員会議、授業ともに、共有だけでなく、共同編集をさらに活用する。 ・使いながら学ばせていくという、学びのプロセスを大切にする。 ・タブレット端末の破損を防ぐためにもモノを大切に扱う心を育成する。

令和4年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
教育実習	・教育実習を円滑に実施するために、大学との連携を一層深める。 ・実習生の指導を通して、教師自身の指導力向上に努め、生徒理解力を高める。 ・教職大学院生の実習を積極的に受け入れ、充実させる。	・本年度は、6月2週間(8日間)及び9月に4週間(15日間)の実習を行う。事前指導は、リモートや対面で丁寧にやりとりをして実習開始までの指導を計画的に行う。 ・教育実習の期間を研究の一環として位置づけ、実習生の教科指導を通して教師自身の授業を振り返り、実習生の授業参観を通して生徒を多面的に観察する。 ・教職大学院生に実習計画と予定を与え、効率的に取り組ませる。	【成果】 ・本年度前年度と同様、2・4週間実習ともに短縮(8日・15日)で行った。4週間実習では、体育祭を行うなど例年と近い形となっており、生徒や実習生とともに充実感・達成感を感じる実習期間となった。 ・感染症対策をしながらも、充実した実習となるよう職員が協力してできた。実習生の協力もあり、感染者は出なかった。 【課題】 ・指導案作成に時間がかかるため、生徒と関わる時間が少なくなることが課題である。生徒理解に重点をおけるよう大学と協議しながら、体制を整えることができるとなお良い。	・コロナ禍にあり感染防止に細心の注意を払いながらの実習は大変だったと思うが例年に近い形で実施できよかった。 ・指導案作成に時間がかかるという課題について、教育実習で授業を体験することが主たる目的ではあるが、そのための指導案であり作成するためには生徒理解が必要である。可能な限り、他の実習生の授業を観察して、生徒の動きを観察させることや実習前にできるだけ指導案を作成するようにしてはどうか。 ・2週間、4週間と限られた時間の中で生徒・教員・実習生の三者にメリットが得られるよう今後も大学との意思疎通・連携をより強化されたい。 ・若年層において、とかく人付き合いが苦手な方が増えつつあると聴く。実習生には、生徒としっかり向き合い実践教育をしていただきたい。	・コロナ前の状態に戻る兆しがあるが、コロナ中に培った教育実習の方法も取り入れつつ、教育現場でしか学べ得ないことを経験させられるよう改善していきたい。 ・実習前に指導案をほぼ完成の状態にしておくことを前提としているが、現場経験がない状態の指導案はどうしても訂正が多くなる。4週間実習では、師範授業を今までより多く見せることで、生徒理解や現場の雰囲気をつかめるようしていきたい。2週間実習については、その余裕がないため、他の案を考えねばならないが、本時以外の学習指導案をデザインシートのようなものに簡略化するなどして、より学生の負担も減らし、生徒理解の為の時間を多く確保できるようにしていくことも視野に入れ改善していきたい。
キャリア教育	・キャリアパスポートを活用して汎用的能力を高める。(全学年) ・教育相談、進路相談の実施(全学年) ・進路適性検査による生徒自己理解、職業調べの交流を通じての様々な職業機会の学びをふまえた、自己の将来について考える機会の設定(1年) ・働くことの大切さについての学び(1年) ・職業調べ、SDGsに関わる体験学習等の実施(1年) ・防災に関わる社会見学等の実施(2年) ・命を大切にする授業、幼稚園訪問の実施(3年) ・進路希望調査の実施、オープンスクール等への参加、進路説明会の実施(3年) ・学部と附属学校教員との連携授業の活用(全学年)	・キャリアパスポートへの記入について、年度や学期の節目でのめあての設定・確認、自らの取組の振り返りを中心に指導・支援していく。 ・道徳、特別活動、総合的な学習の時間において計画的・系統的に行い、充実を図る。 ・教育相談、進路相談、進路説明会は、学校行事として実施する。防災講演会等は、外部講師を招いて実施。命を大切にする授業は、大学と連携して救急救命講習を実施。幼稚園訪問は、技術・家庭科(家庭)の授業の一環として実施。進路希望調査、オープンスクール等への参加は、3年進路指導として実施。	【成果】 ・キャリアパスポートの取組は、どの学年も毎学期、始めに目標設定し終わりに振り返りを行い、定着して実施ができた。 ・修学旅行や社会見学、校外学習は、実施可能な方法を模索して、コロナ禍の状況の中でできる形に工夫して実施した。 ・1年では育友会と連携し、講師を招いてコロナウイルス感染症に関する学習を、2年では講師を招いて進路学習の一環で職業講話を、3年では附属幼稚園と連携した保育実習を実施した。各学年で外部とつながる取組を実施できた。 【課題】 ・キャリアパスポートをさらに効果的に活用する方法を考えたい。生徒の成長につなげるために、取り組みやすい内容にしていくことも必要である。 ・来年度もコロナ禍の対応が必要とされるため、状況に応じて工夫改善を加えて実施できる方法を模索していく。	・キャリアパスポートの活用が定着し、キャリア教育を計画的に実施できていることは評価できる。 ・コロナ禍において行事等、実施可能な体験を工夫しながらできたことは先生方に変なご苦勞をかけた結果だと思う。 ・キャリア教育は、今後も社会に出て生きていくために必用不可欠なものであるため、世の中の動向も踏まえて改善・充実を図っていただきたい。その際、中学校段階で指導する側はどのあたりを目標とするのか、また、防災・減災や男女共同参画の視点を常に意識するようにお願いしたい。	・生徒にとっても、引き継ぐ高等学校等にとっても、意味のある魅力的なキャリアパスポートに改善していく必要がある。 ・進路学習やSTEPで取り組んだシート等を含めることも検討したい。 ・コロナ禍にあって、校外学習に制限がある中、本校が大切にしてきた修学旅行における平和学習、社会見学における震災学習・企業訪問等の学びをどのように効果的に実践していくのか整理する必要がある。 ・ここ数年、イレギュラーな事が多かったが、これまでの形に少しずつ戻していく見通しを持ち、計画的に学習を進めていけるようにしていく。

令和4年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
生徒指導	『つながりあう個』の理念を大切にし、一人ひとりを大切にし、教職員が同じ方向性をもって生徒を育てる。 - いじめの未然防止と早期発見に努める。 - 生徒指導部を中心に、全校での指導体制づくりと情報共有を行う。 - 部活動、交通安全指導、防災教育について生徒指導部会が中心となって取り組む。 - 教師主導ではなく生徒会と連携した活動に取り組む。	- 生徒一人ひとりが「自己決定する場」を多く設定し「自己存在感」を与え、生徒間または生徒と教師との間で「共感的な人間関係」を築く。 - 附属学校園いじめ防止基本方針及びいじめ防止対策年間計画について共通理解を図る。情報リテラシー、ネットモラルの指導を充実させる。 - 生徒指導部会を週1回開催し、情報共有・共通理解を図り、統一した指導を進める。 - 部活動ガイドラインに基づいた部活動指導、年間を通した交通安全指導、防災教育の取組を全校的に統一して進める。 - 四附属で連携したあいさつ運動も行い、教師から率先してあいさつを行い、ひと言つけ加えることを意識する。	【成果】 - 学校生活について、生徒自身に選択し、考えさせる機会を設けることができた。 - あいさつは、教員自らが全ての生徒に積極的にしていくことを確認して取り組んでいる。 - 生徒と教師との関係性も良好であると思われる。 - 情報共有と共通理解を日常から図り、問題があった際は、組織的な対応を行っている。 - いじめの早期発見に向けて、定期的ないじめ調査を実施し、いじめが認められた場合は、適切に解決を図り、その後の経過を見守っている。 - 学期初め、定期テストのタイミングで一斉下校時や登校時の交通指導に取り組むことができた。 【課題】 - 不登校生徒が増加傾向にあり、登校できない生徒に対してのアプローチを様々な面から組織的に取り組む必要がある。 - 生徒指導提要の改訂に合わせ、校則について一部改訂しているが、来年度に向けて見直しをさらに進めていく必要がある。	- あいさつは人とのコミュニケーションの基本であり、生徒自身が自発的にできるように指導を続けていきたい。 - 不登校生徒の増加傾向は気になる。その原因は千差万別であり、その対応についても個々により異なるが不登校生徒と担任を孤独にさせないよう組織的な体制づくりをお願いしたい。 - いじめに対する取組は、情勢を踏まえて対応されており、今後も気を緩めずに取り組んでいただきたい。 - 先生方の日々の努力により生徒との関係性が良好であることは大変喜ばしいが、生徒アンケートによると「気軽に相談できる」と答えた生徒は6割に止まっている。今後も更なる信頼関係を築けるよう取組を進めていただきたい。	- あいさつについては四附としても大切に行っているため、教職員が一体となって、日頃から意識をして指導していく。 - 津市子ども教育センターと連携し、校内の特別支援教育部と協力しながら、体制づくりを今後も進める。 - いじめに対しては、情報を的確に掴み適切な対応を取り、状況によっては関連機関に情報提供して進める。 - 生徒アンケートの「気軽に相談できる」と答えた生徒が6割という数値は確かに低いため、生徒の声をしっかりと「聞く」という姿勢を教職員全体が持てるように今後は進める。 - 生徒指導提要の改訂に合わせて、生徒の様子を踏まえながら、今後も積極的な生徒指導を進める。
道徳教育	- 各学年ごとに年間指導計画を作成をし、生徒の実態にあった指導方法を工夫し、考える道徳、話し合う道徳についての実践を重ねる。特に、命を大切にする教育を推進する。 - 道徳教育推進教師を中心に、昨年度に引き続き学校全体で適切な評価のあり方について研究する。	- 道徳科との関連を意識しながら、各教科における道徳教育のねらいを明確にし実践する。 - 各学年で道徳の授業案の作成を積極的に行い、定期的に学年相互の授業参観を行う。事後検討会により指導の改善を図る。 - 研修会への参加や先進校への視察により、道徳教育の研修を深める。	【成果】 - 担任だけでなく授業を担当する教員が指導案を作成し、その後学年会で授業内容を検討・確認し、実施することができた。 - 各学年とも、学年団全員で授業を行っている。担任だけが授業をするのではなく、副担任も授業をすることで、学年全員で道徳教育を行うことができた。そうすることで、授業者以外の視点から生徒の様子を見ることができている。 【課題】 - どの学年も同じ日、同じ時間に授業があるため、相互に参観する機会を持つことができなかった。事前に教務に相談し時間割を組む必要があるため、今後はいつ授業参観を行うか、あらかじめ決めておくことが必要になる。 - 長期休暇を利用し道徳教育の研修会に参加したが、他の先生への還流や道徳の授業で生かしきれなかったところがある。担当だけで留めず、学年会等で共有していく。	- 道徳教育は生徒の内心にかかわるため、とても難しい面があると考え。その点で、各学年で先生方が相互に協力連携しながらの取組は素晴らしい。 - 今後も外部研修等の知識・情報・ノウハウ等を学校全体で共有化を行い、組織として対応策を講じる必要があると思われる。 - よりよい授業を目指し、まず校内で同学年、異学年で互いに参観し合うことが必要では。各学年学期に1～2回の設定なら時間割変更も可能ではないか。無理のない範囲でできることから実施されたい。	- 今後も担任だけでなく、副担任を含めた学年で授業を行い、学年全体で道徳心を育んでいく体制をつくっていく。 - 定期的に道徳部会を開き、学年の状況や様子を交流する。そして、今後の道徳の授業に生かせるようにする。 - 道徳の授業を参観し合うために、教務と連携をとり時間割を調整し、参観できる体制をつくり授業改善に生かす。（学期に1回は参観し合う体制を整えていくようにしたい） →他学年の授業を参観する →同学年他クラスの授業を参観する

令和4年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
特別支援教育	・生徒一人ひとりの実態を踏まえ、本人・保護者の思いやニーズを把握しながら、長期的な視点に立って、適切な対応を図る。 ・ＳＣ（スクールカウンセラー）や教育支援室と連携しより効果的な支援を推進する。	・1学年と特別支援学校との交流会を通して生徒同士の交流を行う。 ・特別支援部会を週1回開催し、ＳＣや教育支援室との情報共有を図る。また、ＳＣと学年集団との情報共有の場を学期に1回設定する。さらに、ＳＣによる研修会を夏休みに実施する。 ・特別な支援が必要な生徒について、個別の支援計画を作成する。 ・適宜ケース会議を実施する。	【成果】 ・週1回の部会では、各学年の生徒の様子を交流し、養護教諭、SCや附属学校支援員からの情報共有もできた。 ・週3日は附属学校支援員に中学校での学習時間を設け、個別対応ができた。進学進路に向けての対策を行うことができた。 ・夏休みにSCによる研修会の時間を設定した。（開催ができなかったが次年度に引き継ぎする。） ・ケース会議を学期1回は行うことができた。 【課題】 ・個別支援計画が、保護者の同意がないまま作成されているケースもある。懇談時などに保護者への説明や、なぜ作成するのかを伝える必要がある。 ・別室での支援については学年対応となっている。時間割上の別室支援がないために学年でマンツーマン対応となっている現状がある。また支援するための教室も空き教室を把握するなど工夫して使用していく必要がある。 ・対人関係やコロナ不安等による不登校増加により保護者のSCへの相談件数も多い中、今後もSCとより連携を図りながら生徒への対応を考えていきたい。	・特別支援学校との交流を通して、生徒自身が感じ考えることができると思うので無理のない範囲で続けていただきたい。 ・個別支援については、課題を認識している点を解決できるように迅速に対応し、生徒の困り感を保護者と共有し相互理解を基に進めていただきたい。 ・今後も、SC、特支コーディネーター、養護教諭、支援員、学校、保護者の連携を大切にして特別支援教育に取り組んでいただきたい。	・特別支援学校との交流会については、担当者同士で打合せをしっかりと行いながら、インクルーシブ教育、ダイバーシティの視点でも今後も継続して取り組んでいきたい。取り組むことで生徒同士がコミュニケーションを取りながらお互いのことを知るきっかけとなり、交流後にも声をかける姿があった。 - 交流の目的や交流学習に向けての事前学習で理解を深めながら進める必要がある。 ・個別の支援について、本人・保護者の願いを聞き入れながら支援計画を立てていく必要がある。四附内で統一して作成した個別の支援計画の運用が始まり、その活用方法を考えていく必要がある。 ・スクールカウンセラーへの相談件数が増える中、スクールカウンセラーや特別支援員、養護教諭と連携を取りながら個々の生徒が安心して通える体制づくりを図りたい。4月から運用される三重大学・津市子ども教育センターへの引継ぎに向けて生徒の把握をよりしっかりと行っていきたい。
国際理解教育	・教科や各学年、生徒会執行部や国際福祉活動部を通して、津ユネスコ協会への活動参加やESD教育に取り組む。	・津ユネスコ協会の行事に積極的に参加し、使用済み切手やはがき、文房具を回収する取組を進める。 ・各学年による平和学習、防災学習、福祉体験学習の成果を、平和宣言や俳句、個人新聞等で発信する取組を進める。	【成果】 ・各学年の英語科においてALTへの手紙（1年）防災のポスターを外国の人に見てもらう機会を持つ（2年）、ALTへのインタビュー活動（3年）など、英語を使用する必要感を持たせる場を設定できた。 ・SDGsをツールにして地球規模の問題に目を向けることができた。（残飯をたい肥にする活動など） ・国際福祉活動部において津ユネスコ協会の古切手集めを行った。文房具を集め海外に寄付をした。 【課題】 ・海外の学校との交流を持てるようにしたい。	・「さすが附属中」というところを見せていただいた。今後もALTとコミュニケーションをとり経験値を高め実戦で活かせるようにしていただきたい。 ・これからの時代を生き抜いていくためには国際化感覚は必要である。海外の学校との交流の場は是非とも設けていただきたい。	【英語科】 ・ALTがさらに授業に関わる機会を増やす。そのために、ALTが授業者の一人として責任を持てるよう、ALTとの授業打ち合わせを綿密にしていく。 ・三重大学と連携を図り、年間通して海外の学校との交流を授業計画に取り入れる。 【国際福祉活動部】 ・活動部では国内の福祉活動に活動内容が寄っているため、よりSDGsを意識させた地球規模の問題に焦点を当てていきたい。
教育相談	・学校生活における生徒の悩みや思いを把握して生徒理解に努める。 ・不登校生徒の困り感の把握に努め、不登校生徒への対応を学校全体で進める。 ・教育支援センター等の外部相談機関との連携を進めるとともに、不登校生徒の学習機会を多様な形で確保する。	・全校生徒を対象とした計画的な教育相談と、困り感のある生徒に寄り添ったタイムリーな教育相談を行う。 ・ＳＣ，養護教諭，附属学校園特別支援教育支援室と連携しながら、不登校生徒の困り感の把握に努め、継続的な教育相談及び支援を行う。	【成果】 ・各学期1回ずつ教育相談週間を設け、担任と話をする時間を設定できた。 ・生活ノート（ライフ）で毎日やり取りを行っている。休み時間の合間にも廊下で様子を見守り、生徒が担任・副担任に限らず誰にでも話しやすい状況を生み出している。また何かあれば早期解決できるよう生徒指導担当とも連携し、取り組むことができた。 【課題】 - 日々の生徒の様子を見守り、少しの変化でも学年で交流しながらカウンセリングマインドに沿った生徒対応をしていきたい。全体への情報共有、連携を一層進め、生徒一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな対応を図るための支援体制の充実を図る。	・教育相談や生活ノートを活用し、生徒理解に努めておられることは評価できる。 ・一方、生徒アンケートによると約4割の生徒が先生に悩みを気軽に相談できていないという実態もある。生徒の小さな変化を見逃すことなく、学校全体として、きめ細かに生徒を見守り、必要としているときに必要な声かけをしてほしい。 ・悩みの聞き役は、ストレスが大きくメンタル的に病まれる方も多いと思うので、十分なケアをしてほしい。	・担任の先生の協力のもと、教育相談や生活ノート、ロイロノートを活用しながら、日々生徒の様子を把握できる機会を継続していく。 ・1日を通して、休み時間や昼休み、放課後の時間にも生徒の様子を見守りながら、小さな変化を捉え、いつでも相談できる雰囲気づくりを行っていく。また、生徒の情報把握や学年での共有を随時行う。 ・スクールカウンセラーや養護教諭、特別支援員と連携を取りながら情報共有を行っていく。 ・長期欠席の生徒については学年会やケース会などを随時行ないながら、個別の対応を考えていく。

令和4年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
生徒会	・集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組ませる。 ・生徒の互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することから資質・能力を育成することを目指す。 ・「授業」「生活」「仲間づくり」を柱とした活動の充実を目指す。 ・ユネスコや赤十字の活動へ積極的に参加する。	・学級会 → 生徒議会 → （拡大生徒議会）→ 学級という流れを定着させて、組織的な取組を進めていく。 ・生徒会だよりの発行による情報発信を行う。 ・生徒会活動においてもICTの活用を広げる。 ・学校行事における計画・運営等の生徒会活動の活用を推進する。	【成果】 ・行事については、体育祭や文化祭・附中のハーモニーなどの運営を中心に、執行部を中心として計画・実施ができた。 ・目安箱や生徒会通信など、ICTを活用した発信ができるようになった。 ・全校集会ができない状況で、生徒会をまとめていく意識を高める手立てが少なくなっていたが、行事に加えて始業式や終業式などの司会進行・全校に向けて話す機会を得たことで、執行部が全校の様子について考えたり、意識したりする機会が増えた。 【課題】 ・執行部内・生徒会内での対話・発信により積極的に取り組んでいく。 ・特に2学期において話し合う時間の少なさを感じた。ICTを活用することで、その時間を創り出せるように工夫していく必要がある。	・体育祭などの学校行事において、計画や実施を生徒会が中心となり運営できたことは大きな成果といえる。またコロナ禍における安全面等について、考えたり工夫したりするよい機会となったと推察できる。 ・生徒会活動は、国民一人ひとりが社会の形成に参画するという意識を育むために大切だと考えられるので、今後も校則の見直し等を含め、そのような観点からの支援をしてください。	・行事だけでなく、活動部会なども生徒が主体となって運営できるようにしていく。 ・生徒会活動の計画や振り返りなど、全校生徒が考える場を設定していく。 ・「あたりまえ」ではなく、学校生活について自分たちで考え、向き合い、創りあげていくことができるようにはたらきかけていく。 ・時間の無さに追われないよう、生徒会として取り組むべきことを精査していく。
教育環境づくり	・校内美化と施設設備の安全管理に努め、教育環境を整える。 ・働き方改革に積極的に取り組む。 ・風通しの良い学校文化を醸成する。	・日常の清掃活動を充実させるとともに、年2回のクリーン大作戦（除草作業）を保護者、生徒とともにを行い、環境整備に努める。 ・防災の視点から施設設備の改善と危機管理マニュアルの見直しを行う。また、保護者（育友会防災管理部）とともに、防災備蓄品（一人1つの白い小箱）の整備を進める。 ・保護者（育友会図書部）の協力のもと、学校図書館の整備充実を図る。 ・月2日の定時退校日を設定し、総勤務時間の縮減に努める。 ・校務のデジタル化を進め、業務改善を進める。 ・報告・連絡・相談を徹底をし、職員間の意思疎通を図る。	【成果】 ・クリーン大作戦は台風の影響で1回しかできなかったが、防災管理部や図書部、環境部などの育友会と連携し、整備を進めることができた。日常の清掃活動においては、原則毎日実施することで日頃からきれいにする習慣が身につきつつある。 ・2,3年生の机を新規購入、パソコン室のPCを大学の中古であるが更新。職員用PC10台新規購入。 ・デジタル機器をフルに活用し様々な会議を円滑に進め、同時に情報交換を行うことができた。 ・12月から毎週水曜日を定時退校日として設定し（四附属合同）徐々にではあるが、定着しつつある。 ・教員間は職員会議をはじめ各部会等を活用し意思疎通をおおむね図ることができている。 【課題】 ・育友会活動や生徒会活動、防災訓練などが、前年度踏襲になることを防ぐとともに、負担増とならぬようバランスを考えながら活性化を図る。 ・校務や学校行事など常に見直しを行い、働き方改革をさらに推進する。 ・事務や給食調理員などとの連絡体制を整備する。	・社会に出ても整理・整頓・清掃等は重要事項であり、しっかりと身につけるようにしていただきたい。 ・生徒にとっての学習環境整備は大学との連携で進んでいるが、一方で教職員側の職場環境は、不十分である。教育を提供する側に心身のゆとりができるよう今後も持続的な改善が望まれる。	・施設整備について大学と連携をとり優先順位を明確にし環境改善に努める。 ・育友会と連携をとり人的に必要な環境改善を含め、今後も協力を求めていく。 ・勤務時間について、毎週水曜日の定時退校日のさらなる遂行を行うと共に、業務のスリム化を図る。 ・事務や栄養教諭、給食調理員とも連携をとり報告・連絡・相談体制を整える。 ・明るい職場づくりを日常的にできるように努める。
開かれた学校づくり	・学校評議員会（兼 学校関係者評価委員会）を開催して、学校関係者評価を行い、学校運営の改善を図る。 ・学校通信、学級・学年通信、進路通信、保健だより等の発行による情報発信に努める。 ・学校HPの更新に努める。	・年3回、学校評議員会を開催し、学校運営に関する意見を集約する。また、PDCAを機能させ学校関係者評価や学校自己評価の活用を行う。 ・各種たよりによる情報発信とともに、教育活動に関する学校アンケート等の公表等による情報提供を行う。 ・HPの更新作業が出来る職員を各学年1名以上とする。	【成果】 ・年3回の学校評議員会を無事開催でき、職員会議や運営委員会を通して、その内容を職員に周知することができた。 ・各種たよりによる情報発信だけでなく、きずなネットの活用によるメール配信を通して情報発信を適宜することができた。 【課題】 ・HPの更新作業ができる職員を増やすことができていないため、担当をより明確にし更新作業ができる職員を増やしたい。 ・各種たよりにおいて、デジタル化をした方がいいかどうかを分析し、より確実に各家庭に伝わるようにしていきたい。	・HPについて、項目により更新作業に差異がみられる。担当任せにせずチェック体制の構築など組織としての対応も検討されたい。 ・保護者アンケートによると、学校からの情報提供に不満足な家庭が20～30%あり、紙媒体とHPやきずなネット等の併用は益々求められると考えられる。 ・通学区域がないため難しいことではあるが地域社会（学校に関わりの方々）の声も大切にしたい。	・生徒や保護者、地域等の対象に応じて、紙媒体、HP、きずなメールなどをどのように活用するか整備する。 ・必要な情報を的確にかつ加重にならないよう配慮して情報発信を行う。 ・HPの分担の見直しを実施する。